国　語　問　題

注 意 事 項

1．試験開始の指示があるまで問題冊子を開いてはいけません。

2．この問題冊子は 24ページです。落丁、乱丁、印刷不鮮明などの箇所がある場合には申し出てください。

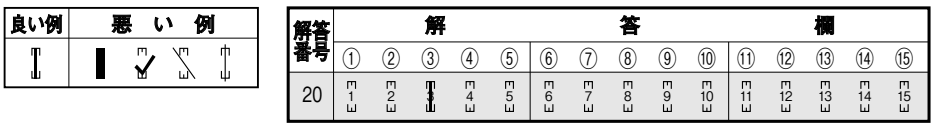
3．問題冊子および国語解答用紙（マークシート）と国語記述解答用紙が配布された後、各解答用紙の所定欄に座席番号・氏名・フリガナを正確に記入し、国語解答用紙の座席番号欄には座席番号を正しくマークしてください。

4．解答は必ず国語解答用紙の指定された箇所に正しくマークし、記述式問題の解答は国語記述解答用紙に記述してください。マーク箇所を誤った解答は無効です。

5．マーク解答欄記入上の注意

⑴　解答は指定された解答欄にマークし、その他の部分には何も書かないでください。例えば、 **20** と表示のある問いに対して、③と解答する場合には、次の例のように**解答番号 20** の**解答欄**の③にマークしてください。

例



⑵　複数の解答がある場合も、同じ解答欄にマークしてください。ただし、指示された解答数より多くマークした場合は、その解答はすべて不正解となります。

⑶　解答用紙へのマークはすべてＨＢのシャープペンシルまたは鉛筆で行い、訂正する場合にはプラスチック製消しゴムで丁寧によく消し、消しくずはきれいに取り除いてください。

⑷　解答用紙は絶対に汚さないでください。また折り曲げたり破ったりしないでください。

⑸　解答欄の所定欄以外の余白部分は、何も記入しないでください。記入したり、汚したりすると解答用紙読み取り時の誤読の原因となり、採点できない場合があります。

6．国語記述解答用紙については、注意事項をよく読み、指定された設問について解答しなさい。

7．試験時間中に退場することはできません。

8．問題冊子は必ず持ち帰ってください。

9．解答用紙は持ち帰ってはいけません。

Ⅰ　次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

「対人恐怖症」というのは、自分の身体的な劣等性や欠陥が他人から軽蔑されるとか、他人に不快感を与えるとかの確信から人前に出ることができない、という特徴をもつ一群の神経症の総称である。その代表的な症状としては、赤面恐怖、表情恐怖、自己視線恐怖[*1]、異貌恐怖[*2]、体臭恐怖などがある。思春期・青年期に好発し、西洋諸国と比べて日本人に圧倒的に多いとされている。

（中略）

精神科医には周知のことだが、これらの対人恐怖症状にはひとつの注目すべき特徴がある。それは、これらの症状の出現が(1)「状況を選ぶ」ということである。いいかえれば、患者にとって症状の出やすい（したがって苦痛の激しい）状況と、症状の出にくい（苦痛の軽い）状況が、かなりはっきり区別される。ただしこの状況選択性は、症状が重篤になるにつれて目立たなくなる傾向が指摘されている。

症状が出にくく、患者にとって楽な状況には二種類あって、その第一は家族や気心の知れた友人など、いわゆる「身内」だけのうちにいる状況、そしてもうひとつは、逆に周囲がまったく見ず知らずの「あかの他人」だけという状況である。対人恐怖の症状は、普通、この両極端の中間の状況、つまり完全な身内でもなく、まったく無関係な他者でもないという、［X］の人たちの前でもっとも強く出現する。この中間的な対人状況とは、いわば患者が自分と相手との関係あるいは心理的距離を、さまざまな程度に意識せざるをえない状況だということができる。［A］、通常なら症状の出現しないはずの「あかの他人」に対しても、何かの拍子で偶然その人とのあいだに関係の生じたときには、即座に対人恐怖症状が現れる。それはたとえば、電車で座っていて前に立った老人に席を譲り、老人からお礼の言葉をかけられたとか、何かをうっかり落としてだれかに拾って貰ったとか、身体が接触して謝るとか、そういったごく一時的な対人関係で十分である。

この中間的な対人状況は、どのような構造から対人恐怖症の症状発現を(ア)ソクシンするのだろうか。この点を考察することによって、通常の日常性ではシュッツ[*3]のいう「自然な態度のエポケー[*4]」によって隠蔽されている私的かつ公共的な「私」の両義性を、精神病理学的に明らかにすることができるのではないかと思われる。

対人恐怖症が、健常者における羞恥の現象の病的に(イ)ヒダイしたものであることは、容易に考えられる。内沼[*5]も、対人恐怖症と「人見知り」との

あいだには発達論的に深い関係があり、症状変遷を逆に病前にまでさかのぼれば「人見知り」に行きつくことを指摘して、対人恐怖症状全体を「羞恥の病理」として考察している。そう考えれば、ルース・ベネディクト[*6]が『菊と刀』（一九四六）で「恥の文化」として規定した日本の文化圏に対人恐怖症が多く見られるという、その「文化依存性」もよく理解できる。

羞恥の現象学的研究としてよく引き合いに出されるものに、マクス・シェーラー[*7]の未完の遺稿「羞恥と羞恥心」（一九一三）がある。この論文でシェーラーは、人間が性器や裸身を隠すという性的羞恥心の分析から考察を開始している。彼によると、《身体が人間の本質に属するからこそ、人間は羞恥せざるをえない状態になる》ことがあるのだし、また《自分が精神的人格として存在することを、「身体」および身体から生じうるすべてのものからまったく独立したものとして体験するからこそ、人間が羞恥しうる状態になることが可能なのである》。だから羞恥心の生じる本来の場所は、《思考、観照[*8]、意欲、愛などの超動物的営為の一切である精神と、それらの存在形態である「人格性」とが、動物的なものと(a)漸次的にのみ相違するにすぎないもろもろの生命欲動および生命感情に対して、接触を保っている個所》であり、したがって《動物には羞恥心とその特定の表現とが欠けて》いるし、一方《「羞恥する神」を思い浮かべることはまったくの背理》である。

具体的に羞恥心の発生しうる場面として、シェーラーは次のような例を挙げる。非常に羞恥心の強い女性でも、モデルとして画家に見られたり、患者として医者に見られたり、入浴中に召使いに見られたりしても、羞恥を感じない。それは彼女が、芸術的鑑賞の対象、症例、女主人などとして一般者的に与えられていると感じているからである。恋人から注視されているときも彼女は羞恥を感じない。この場合には、自分が個人としてのみ与えられていることを知っているからである。B、(2)画家や医者や召使いが、彼らの精神的志向のなかで一般的な態度から逸脱して個人の目で彼女を見、そのことが彼女に感づかれると、彼女はその瞬間に「自分自身へのかえりみ」を起こして、激しい羞恥を感じるだろう。C、恋人の志向が個人としてのあり方から逸脱し、画家がモデルを見るような目で彼女を見たとする。それに彼女が気づいたら、彼女はすぐさま反射的に羞恥を感じるだろう。要するに羞恥を開始させる自己へのかえりみが生じるのは、《感知される他人の志向が個体化的意図と一般化的意図とのあいだで動揺する場合であり、自分の志向と［自分によって］体験された相手の志向とがこの相違に関して同一方向ではなく反対方向をとる場合である》。このようにして、羞恥は総じて《一般者の全領域に対する個人の個的価値の防衛感情》だとみることができる。

（中略）

ここで十分に注意しておかなければならないことがある。われわれはややもすると「私的」を「個別」に、「公共的」を「一般」に対応させが

ちであるけれど、厳密にみれば両者の関係はもっと複雑である。

公共性はいうまでもなく多様な個別をゼンテイ(ウ)としている。私たち人間がそれぞれに――各自的に――個別者でありうるのは、各自がそれぞれの身体をもって生まれてきたからにほかならない。個人の生命は、必然的に身体的（有機的）生命であらざるをえない。私と他者とは、別個の身体を与えられていることによって別人なのである。

これに対して、個別的身体を媒介として立ち現れる私的内面は、それ自体として――つまり身体的個別化以前の（この「以前」はさしあたり時間的ではなく、構造的な「以前」である）現実として――みるならば、そこには自他の区別、私と他者の区別はまだまったく成立していない。[*9] レヴィナスが他者の「顔」に公現するとした絶対的他者性は、この段階では、そのまま絶対的自己性でもある（だからわたしは、レヴィナスが他者の顔から読みとっている「汝殺すなかれ」は、「私」自身の死の恐怖と同根だと考えている）。(3) 身体や顔を通じて内面が外面化するとき、この「内面」にはまだ「私」や「汝」の標識がつけられていない。この標識は、外面化が完了した後にはじめて、事後的につけられる。「私的内面」は、それ自体としてみれば、まだ「私」一人のものではない。それはいわば、当面の相手にまで拡大された私的内面であり、通常は一人称複数の「私たち」によって代表されるような内面である。

（中略）

そこでいま一度、対人恐怖症状の発生状況に戻ってみよう。症状の出現しにくい状況、[D] 一方で気心の知れた身内、他方でまったく無関係な他者たちに囲まれた状況というのは、複数一人称的・私的な世界か、それとも三人称的・公共的な世界かのいずれかが圧倒的に優勢であって、患者に両義的な選択を迫らない状況であるといってよい。患者は気楽な身内のなかで、自己の個人的で単数一人称的・私的な内面を、相手との複数一人称的に拡大された私的内面のなかへと、ほぼ完全に埋没させて過ごすことができる。またもう一方の見ず知らずの他者たちのあいだでは、患者は彼らと無関係に、もっぱら自己の私的な内面のみを生きることができる。

これに対して、症状の出現しやすい [X] に囲まれた状況では、患者はつねに、自己自身を私的・一人称的内面として規定すべきか、それとも公共的・三人称的個別として規定すべきかの二者択一を迫られることになる。いいかえれば患者は自分のことを、いまここでの唯一無二の私的な「私」として生きるべきか、それともだれにとっても通用する一般的規定としての公共的な「私」として理解すべきかの両義性の板挟みになっている。健常者の自然な自明性の中では完全に隠蔽されているこの二つの「私」のあいだの齟齬(そご)が、シュッツのいう「自然な態度のエポケー」を無

効化するような仕方で問題として浮かび上がり、患者を(b)いたたまれない気持ちに追いつめる。患者はこの苦痛を、この(4)二つの「私」のあいだを媒介する自己身体（特に顔）の欠陥のせいだと思い込む。

（木村敏『関係としての自己』より。出題にあたって、本文を一部改変した。）

＊注1　自己視線恐怖　自分の目が異常に鋭いとか「いやらしい」目つきだとかの理由で、相手と目を合わせようとしない神経症のこと

2　異貌恐怖　自分の顔が異常で他人に不快感や恐怖感を与える等の理由から、人を避ける症状を示す神経症のこと

3　シュッツ　アルフレッド・シュッツ（1899－1959）、現代の現象学的社会学の出発点に位置する社会学者、哲学者

4　自然な態度のエポケー　自己や世界の存在に関する素朴な確信に対する一切の懐疑を停止して、その判断を保留すること。これは、私たちが生きている日常生活の巨大な自明性を保障して、これを健全に保つ生活の知恵であるといわれる。

5　内沼　内沼幸雄（1935－）、日本の医学者、精神科医。対人恐怖症を長年研究し、神経症が次第に進行するにつれて、赤面恐怖→表情恐怖→（自己）視線恐怖→醜貌（異貌）恐怖の順に症状が変遷して行くことを指摘した。

6　ルース・ベネディクト　文化人類学者（1887－1948）。後の日本人論の源流となる『菊と刀』の著者

7　マクス・シェーラー　ドイツの哲学者・社会学者（1874－1928）。現象学的方法を心理学・社会学・哲学などに適用した。

8　観照　客観的な視点でものごとの本質を見極めること

9　レヴィナス　エマニュエル・レヴィナス（1906－1995）。フランスの哲学者。現象学に関する研究を出発点とし、ユダヤ思想を背景にした独自の倫理学を展開した。

問一　傍線部(ア)・(イ)・(ウ)のカタカナは漢字でどう書くか。解答例にならい、それぞれ①～⑩の中から正しい組み合わせとなるように漢字を二つずつ選び、同一解答欄にその番号を両方ともマークしなさい。

(ア) 1　(イ) 2　(ウ) 3

(解答例)　トクテイ

① 得　② 徳　③ 特　④ 匿　⑤ 督　⑥ 帝　⑦ 定　⑧ 底　⑨ 訂　⑩ 呈

答　③　⑦

(ア)　ソクシン

① 速　② 促　③ 即　④ 息　⑤ 束　⑥ 審　⑦ 信　⑧ 伸　⑨ 進　⑩ 振

(イ)　ヒダイ

① 否　② 被　③ 費　④ 肥　⑤ 飛　⑥ 代　⑦ 台　⑧ 大　⑨ 題　⑩ 第

(ウ)　ゼンテイ

① 全　② 善　③ 前　④ 然　⑤ 禅　⑥ 訂　⑦ 程　⑧ 定　⑨ 低　⑩ 提

問二　傍線部(a)・(b)の本文中の意味として最も適切なものを、それぞれ①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

(a)　漸次的

① 個々の特性に基づいて
② 空間的な隔たりの中で
③ ゆっくりなし崩す様に
④ 刻一刻と変化する中で
⑤ 徐々にゆるやかな形で

(b)　いたたまれない

① イライラして、まったく落ち着きがない
② まわりに頼りにできる人が誰もいない
③ 緊張して、何をしたらよいかわからない
④ 平静でいられず、じっとしていられない
⑤ 焦って物事を考える心のゆとりがない

(a) 4

(b) 5

問三　空欄 A ・ B ・ C ・ D に入る語句の組み合わせとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。 6

① A　つまり　B　そして　C　それゆえ　D　いわば
② A　ゆえに　B　しかし　C　さらに　D　および
③ A　そこで　B　だが　C　それとも　D　あるいは
④ A　そして　B　そこで　C　かつ　D　すなわち
⑤ A　だから　B　ところが　C　また　D　つまり

問四　傍線部(1)「症状の出現が「状況を選ぶ」」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。 7

① 症状が悪化すればするほど、だれに対しても、そして、どのような状況においても、症状が発生しやすくなるということ
② 「身内」しかいない、もしくは「あかの他人」だけしかいないというような限定的な状況では症状が出にくいということ
③ 自分自身の置かれている周囲の状況が良くなれば良くなるほど、対人恐怖症状の現れる頻度が著しく低下するということ
④ 症状が出やすいか否かは、自分と相手との間にこれまでに築いてきた人間関係の緊密さ及び深さに比例するということ

問五　空欄 X に入る文として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。 8

① 中途半端な顔見知り
② 何でも話し合える仲間
③ まったく交流のないご近所
④ 職場で仕事を共にする同期

問六　傍線部(2)「画家や医者や召使いが、彼らの精神的志向のなかで一般的な態度から逸脱して個人の目で彼女を見、そのことが彼女に感づかれると、彼女はその瞬間に「自分自身へのかえりみ」を起こして、激しい羞恥を感じるだろう」とあるが、ここでいう、「自分自身へのかえりみ」とは何か。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。 9

① 自分が他者に個別に与えられているのか一般者として与えられているのか省察すること
② 個別化的意図と一般化意図との間で何度も繰り返し視座の転換を図ろうと試みること
③ 体験された他人の志向と自分自身の志向とが同一の方向をとっていると思い込むこと
④ 感知される他人の志向が一般的な態度から逸脱してしまっていることに感づくこと

問七　傍線部(3)「身体や顔を通じて内面が外面化するとき、この「内面」にはまだ「私」や「汝」の標識がつけられていない」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。　10

① 他者性であれ自己性であれ、それらが絶対的なものである限りにおいて、私や汝という相対的な区別は成り立たないということ

② 私や汝という区別ができるのは身体や顔にそれぞれ個性があるからであり、そうした個性がなければ区別できないということ

③ 内面は顔や身体を媒介として立ち現れたとしても、個別化が完了しないうちは私の内面とも汝の内面ともいえないということ

④ 個人の生命の基本は身体的生命であったとしても、生命自体は公共的なものでもあるから、私と汝との差は生じないということ

問八　傍線部(4)「二つの「私」」とあるが、その内容を、国語記述解答用紙に、六十字以内（句読点を含む）で説明しなさい。

（この枠は下書き用です。別紙の国語記述解答用紙に記入のこと。）

Ⅱ　次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

「思いきって手術をしますか」

冬のはじめ、(1)諦めたように主治医がやっとそう言ってくれた時、男はむしろ、何でもいいこの生ける屍(しかばね)のような毎日からカイホウされることだけをせつに望む気持になっていた。(ア)

「そうしてください。でも、二回も手術して癒着した肋膜(ろくまく)を剥(は)がす時はどのくらいの血がながれるのですか」

この時も若い主治医は窓のほうに眼をそらせた。そして何も答えなかった。その表情から三度目の手術には死ぬ可能性もあるなと男は見てとった。

その午後、彼は病院に来た妻に九官鳥を買ってくれと頼んだ。乏しくなった家計からかなり高いこの鳥を買うのは妻には気の毒な注文だとは思ったが、どうしてもほしかったのである。もう誰とも話をしたくなかったし、医師の慰めもほとんど信じない気持になっていた。

唐草模様の風呂敷に鳥籠を包んで妻が九官鳥を冬の病室に運んで来たのはそれから三日目の午後で、籠のなかで漆黒の頸(くび)に黄色い線の入った鳥が止り木にしがみついていた。ぬれた眼で虚空の一点をじっと見つめたまま、陽が退く時間になっても動かない。

夜、妻が帰ったあと病院のなかはいつものようにさむく空虚だった。廊下にだけ小さな灯がともり、時折、遠くから便所の戸が軋(きし)み、サンダルをならす音が聞えてくる。(2)止り木からいつか籠の底におりた九官鳥は羽をふくらませて部屋の闇の部分を見ていた。

男は、この九官鳥が欲しかった自分の気持ちを噛(か)みしめた。もう医師や見舞いの客や妻にさえも微笑をつくったり元気そうな声を出すのに疲れた自分が、話をできるのはこの鳥だけのような気がしたのである。この鳥は人間の声や言葉を真似(まね)るくせにその意味はわからぬ。男はひょっとして手術台で死ぬかもしれぬ今度の手術のことを考え、(3)自分の死んだあと、この九官鳥が彼とそっくりの声をだしてしゃべりだすのを空想してひくく笑った。

「なあ」

と彼はベッドから羽をふくらませた鳥に話しかけた。

「俺はこの病室で二年半くらした。お前はその籠のなかに何年いる」

九官鳥は彼をじっと見た。

朝から始まり六時間かかった手術日には雪がふった。麻酔から眼がさめると、もう翌日の朝がた近くで窓枠に白い雪が溜っていた。色々なチューブや針がさしこまれた体は機械のように無感覚で、半時間ごとに看護婦が何本もの注射を一度にうち、足ばやに病室を出ていった。

男がようやく危機を脱出した数日後、妻は彼の心臓が手術中、停り、それが動いて、医者が奇蹟だと言ったことを話した。

「九官鳥は」

かすれた彼の声に妻は首をふって、

「死んだの。あの夜はひどく寒かったでしょう。面倒をみている余裕なんか誰にもなかったんですもの」

ようやく体を動かせるようになってから、彼は病室の隅に新聞紙に包んだ鳥籠のあるのに気がついた。(4)鳥籠には九官鳥の糞が灰色に、わびしく、こびりついていた。

（中略）

男はむかし切支丹[*1]時代を背景に小説を書いたことがある。小説を書きながら彼はモデルにしようとした何人かの背教司祭の顔に次第に心ひかれた。

背教司祭とは幕府の弾圧に信仰を捨てた神父たちのことである。(a)すさまじい拷問と死のイカク(イ)に遂に転んだ聖職者たちのことである。彼等のなかには波濤万里あらゆる苦労をなめて日本に渡り、馴れぬ異国での生活に耐えて、長年、布教を行ってきた外人司祭もいたし、あるいはその外人司祭の奨めで遠いヨーロッパで勉学した、日本人司祭もいた。

男はそうした何人かの敗北者たちのショウガイ(ウ)を集めて一人の主人公を創ったが、小説を書きおえたあとも汗にまみれ苦痛にゆがんだそれらの顔がいつまでも心から離れず、暇をみては彼等がみじめに生きのびた跡を歩きまわった。

ある初夏の真昼、長崎の古い寺をうろついていた。寺の背後の斜面を無数の墓が埋めつくしていて、男はその墓の一つ一つを覗きこんでいたのである。記録によれば、このどこかにF[*2]とよぶポルトガルの背教宣教師が埋められていた。過去帳にはもうその名は見当たらなかったが、男はそれがここにあることを資料から知っていたのだ。

あちこちに古い大きな樹が茂っていて、時折、男はその樹の下に足をとめて汗をふいた。何処からか風に送られ蜂の羽音がきこえ、樹木の葉が

ゆれて古い墓に影をつくる。(5)自分も死んだらこういう大きな樹木の影のなかに憩いたいとその時、男はせつに思った。

そこからは長崎の古い町なみが見おろせた。彼がその墓を探している背教司祭は拷問に耐えかねて転んだあと、この寺のちかくで日本人たちから蔑(さげす)まれながら生きたのである。司祭は奉行所から僅かばかりの扶持(ふち)をもらったが、その代りに奉行所によばれて、捕えられた別の外人宣教師の訊問(じんもん)を通訳したり、かつての同僚に棄教を奨め、その拷問に苦しむ姿を目撃せねばならなかった。いわば長い間、自分を支えてきた信仰に唾かけねばならぬ屈辱の仕事をさせられたのである。

初夏の長崎の空は真青だったが、寺をとりまく古い家々は黒かった。もちろん、町の並びも道すじもその背教司祭がここに住んでいた頃とはすべて変ったことを男は知っていたが、(6)まるでそれらが昔のままのように、長い間、空と家々とを眺めていた。

その背教司祭が一人になった時、どんな思いにかられ、どんな風に泪(なみだ)をながしたか記録には残ってはおらぬ。ただ出島にいるオランダ人の一人がそのショカン(エ)の一節に何気なく「彼は犀鳥(さいちょう)*3という鳥を飼って住んでいます」と書いているのを男は強く記憶に残していた。

犀鳥というのがどんな鳥か見たことはない。しかし暗い部屋のなかでその一羽の鳥とじっと向きあっている影のような背教司祭の姿は男にも想像できた。ずっと昔、寝しずまった病院の一室で九官鳥に話しかけた自分を思いだしたからでもある。

デパートの小禽(ことり)売場の主任は男が犀鳥という名を呟(つぶや)いた時首をかしげた。

「そうねえ。すぐには見つからんとは思いますが、同業者に当ってみましょうか」

そのくせ主任の気のなさそうな顔をみて男はどうせ駄目だろうと思った。事実、それから二カ月たっても三カ月たっても、小鳥や熱帯魚を覗きこんでいる男に主任は犀鳥のことはもう忘れたように話かけてきたし、男も男でもう犀鳥のことは二度と口にしなかった。だがその年の冬、「渋谷の小禽屋の主人ですがねえ」突然受話器の向うに主任の声がきこえて「犀鳥を持っているそうですよ。ええ、犀鳥です。見せてもいいと言っていますがね」

底びえのする空の曇った午後だった。主任はその持主と一緒に男の家にあらわれた。ガストーブが小さく燃えている男の部屋に金網の鳥籠が運ばれ、鳥に似てうすよごれて黒い、鳥よりは嘴(くちばし)のひどく大きな鳥がその籠にうずくまっていた。

（これが犀鳥か）

男は羽をひろげるようにして鳥籠の隅に身じろがぬ鳥を眺めた。

「わたしも初めてだ、この鳥を見るのは」
と主任も専門家らしく籠の前にしゃがみこみ、
「かなり年とっているな」
すると人のよさそうな中年の渋谷の小禽屋は弁解した。なにしろこいつは三年ほど前にアフリカに行った日本人船員が持ちかえってしばらく飼っていたが、やがて行きつけのスナックのママさんにゆずり、そのママさんも持てあまして自分のところに持って来たんだからな。
「暖かいところが好きでさ。ストーブのそばにおいてやると、羽のなかにさ、頸(くび)を入れて静かにしているよ」
「食べもんは」
「何でも食うな。林檎(りんご)でも蜜柑(みかん)でも。うちじゃ沢庵(たくあん)でも食わせてんだ」
二人の会話を聞きながら男も妙な鳥だと思った。何よりもふしぎなのはこの鳥に睫(まつげ)があることだった。まるでマスカラをつけた女の泣き顔のような顔をしている。
二人が引きあげたあと男はガスストーブの火を細くして机に向った。あけた鳥籠の口から犀鳥はいつの間にか出て、床の上にじっとうずくまっている。泣いている女に似たその顔をじっと眺めていると、それはまた道化師の泣き笑いの表情のようでもある。南の国から日本に連れてこられ、あちこちの持主を転々とした鳥の羽はぬけてかつて漆黒だった色もあせてしまっている。
背教司祭もこの鳥と同じようにショウガイ、故郷のポルトガルに戻ることを許されず、奉行所の監視をうけながら一生、日本の長崎に住まわされた。*4檀那寺(だんなでら)も持たされ、仏像を拝まされ、ある死刑囚の日本名を無理矢理与えられ、日本人に帰化させられたのである。彼には慰めてくれる友もなければ、心をうちあけられる肉親もなかった。この道化師のような一羽の鳥だけがおそらく残された話相手だったのだ。
（遠藤周作「犀鳥」『母なるもの』より）

＊注

1　切支丹　戦国時代に日本に伝わり、豊臣秀吉、江戸幕府によって禁止されたカトリック教およびその信者

2　F　クリストヴァン・フェレイラ　ポルトガル出身のカトリック宣教師であったが、禁教令による拷問により棄教し、キリシタン弾圧に協力した。

3　犀鳥　大きなくちばしの上にサイの角を思わせるこぶのある鳥

4　檀那寺　自家が信仰を置いている寺。江戸時代には、戸籍管理のような役割を担っていた。

問一　傍線部(ア)・(イ)・(ウ)・(エ)のカタカナは漢字でどう書くか。解答例にならい、それぞれ①～⑩の中から正しい組み合わせとなるように漢字を二つずつ選び、同一解答欄にその番号を両方ともマークしなさい。

(ア) 11　(イ) 12　(ウ) 13　(エ) 14

(解答例)　トクテイ

① 得	② 徳	③ 特	④ 匿	⑤ 督	⑥ 帝	⑦ 定	⑧ 底	⑨ 訂	⑩ 呈

答　③　⑦

(ア) カイホウ

① 介	② 開	③ 快	④ 会	⑤ 解	⑥ 方	⑦ 報	⑧ 放	⑨ 抱	⑩ 法

(イ) イカク

① 居	② 異	③ 威	④ 位	⑤ 意	⑥ 角	⑦ 嚇	⑧ 殻	⑨ 獲	⑩ 核

(ウ) ショウガイ

① 渉	② 障	③ 傷	④ 生	⑤ 証	⑥ 街	⑦ 外	⑧ 涯	⑨ 害	⑩ 概

(エ) ショカン

① 書	② 所	③ 初	④ 暑	⑤ 緒	⑥ 感	⑦ 管	⑧ 巻	⑨ 寒	⑩ 簡

問二　傍線部(a)の本文中の意味として最も適切なものを、①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

(a)　すさまじい

① ものすごく白々しい
② ものすごく図々しい
③ ものすごく悲しい
④ ものすごく激しい
⑤ ものすごくしつこい

(a) 15

問三　傍線部(1)「諦めたように主治医がやっとそう言ってくれた」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

16

① 主治医が、患者である「彼」の家計が厳しいことを知っていたため、負担にならないように早めに退院させようと思ったから
② 主治医が、患者である「彼」の生気のない毎日から脱したいという切実な思いをくみ取り、失敗覚悟で手術をしようと同意したから
③ 主治医が、患者である「彼」の死ぬ覚悟で病を治そうとする意気を感じ取り、失敗する可能性の高い手術を行おうと決意したから
④ 主治医が、患者である「彼」のさむく空虚な病院施設に対する不満を知っており、できるだけ早めに手術しようと思ったから

問四　傍線部(2)「止り木からいつか籠の底におりた九官鳥は羽をふくらませて部屋の闇の部分を見ていた」とあるが、「男」はそれを見て、どのように感じたか。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。　17

① 遠くから便所の戸が軋んで聞こえる音が不気味で、九官鳥がおびえていると感じている。
② 止まり木にしがみついていた九官鳥が、いつの間にかおりて休んでいたことに安堵している。
③ 前向きに生きる希望を失ってただ死と向きあっているだけの自分と九官鳥を重ねている。
④ 生ける屍のような状況を受け入れ、闇を見つめる九官鳥と静かに過ごしたいと思っている。

問五　傍線部(3)「自分の死んだあと、この九官鳥が彼とそっくりの声をだしてしゃべりだすのを空想してひくく笑った」とあるが、なぜ笑ったのか。その理由として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。　18

① 「自分」の辛い気持ちを理解した九官鳥が、他の人たちに自分の声でその気持ちを伝えてくれている様子を想像したから
② 「自分」がいないところで、九官鳥が真似ているだけの「自分」の言葉を他者はどのように感じ取るのだろうと思ったから
③ 「自分」が元気そうな声を出してしゃべっている姿が、意味も分からずしゃべっている九官鳥の姿と重なったから
④ 「自分」は手術台で死ぬかもしれないが、もし死んでも、「自分」の気持ちを代弁して九官鳥がしゃべってくれると信じたから

問六　傍線部(4)「鳥籠には九官鳥の糞が灰色に、わびしく、こびりついていた」とあるが、「彼」はそれを見て、どのように感じたか。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。　19

① 「彼」は、九官鳥が自分の身代わりとなって死んでくれたのだと、感謝の思いで一杯になっている。
② 「彼」の妻が淡々と九官鳥が死んだことを伝えてくる姿を見て、薄情だと感じている。
③ 「彼」は、鳥籠の九官鳥と病室の自分を同一視し、自分も何も残せず死んでいくと感じている。
④ 「彼」は、自分の死も、生の痕跡をわずかに残すだけで、九官鳥と同じようなものだと感じている。

問七　傍線部(5)「自分も死んだらこういう大きな樹木の影のなかに憩いたい」とあるが、それはどのような思いであるのか。最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。　20

① 背教司祭の境遇に「自分」を重ねており、苦痛や苦悩と離れて、何かに守られる形で、人知れず静かに安らぎたいという思い
② 背教司祭の境遇は「自分」よりもあまりにも辛くひどいものだったので、今は安らかにねむってほしいという強い思い
③ 背教司祭は屈辱にまみれた人生を送らねばならなかったとしても、やっと安住の地を見つけて静かにねむれていることを羨む思い
④ 背教司祭と「自分」の境遇を重ねており、生きる悲しみや辛さというものは、死んでもなお続いていくことを知っているという思い

問八　傍線部(6)「まるでそれらが昔のままのように、長い間、空と家々とを眺めていた」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

21

① 寺をとりまく古い家々は黒かったが、それに比べて初夏の長崎の空は真青で美しく、見とれてしまったから

② 信仰に唾をかけねばならぬ屈辱の仕事を続けた背教司祭の気持ちを慰めるように空が青く澄んでいたから

③ 真青な空とは対比的に黒々とした家々に、背教という闇に落ちた宣教師の姿を見たように思ったから

④ 背教司祭が受けた屈辱は、決して癒えることなく、長崎の古い町なみのなかでいまなお続いているから

問九　本文の内容と一致するものを、次の①～⑥の中から二つ選び、同一解答欄にその番号を両方ともマークしなさい。　22

① 暗い部屋で一人で孤独に犀鳥と向き合いながら死んだ背教司祭と、病院の一室で九官鳥と話しながらも手術に成功した「男」とでは、実は似て非なる存在であった。

② 睫があり、まるでマスカラをつけた孤独な女の泣き顔のような顔でありながら、道化師の泣き笑いの表情も併せ持つ人間のような犀鳥は、九官鳥とは異なる存在であった。

③ ともに故郷から切り離され、犀鳥と寄り添うように生きた背教司祭の姿は、死を目の当たりにした孤独の中で九官鳥を求めた「男」の姿と重なるものであった。

④ 生きる屍のように、悲しく生き続けなければならない背教司祭と「男」は、犀鳥や九官鳥を話し相手にすることで、生きる希望を取り戻した。

⑤ 背教司祭と「男」は、いつ死んでもおかしくないような孤独な状況下のなかでも、ついには生き延び、初夏の樹木が揺れる長崎の町で安らかに過ごせた。

⑥ もとは人目を引く存在であったはずが、最後には世の片隅でようやく生き続けているのみであるという犀鳥の姿が、背教司祭にも通じるものであった。

Ⅲ　以下のそれぞれの設問に答えなさい。

問一　次の(1)～(3)の四字熟語の空欄に入る漢字を、解答例にならい、それぞれ①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

(解答例)　三□四温

①漢　②乾　③甘　④寒　⑤閑

(1)　前後不□

①画　②覚　③確　④格　⑤拡

(2)　狂□乱舞

①喜　②気　③奇　④鬼　⑤希

(3)　好機□来

①統　②当　③投　④登　⑤到

(1) 23　(2) 24　(3) 25

答　④

問二　次の(1)～(3)の熟語の対義語は漢字でどう書くか。解答例にならい、それぞれ①～⑩の中から正しい組み合わせとなるように漢字を二つ選び、順番は無視して、同一解答欄にその番号を両方ともマークしなさい。

(解答例)　拡大 ↔ □□

① 小　② 尺　③ 縮　④ 弱　⑤ 滅　⑥ 贈　⑦ 刷　⑧ 少　⑨ 増　⑩ 限

答 ① ③

(1)　高尚 ↔ □□

① 底　② 迷　③ 級　④ 俗　⑤ 安　⑥ 価　⑦ 物　⑧ 低　⑨ 辺　⑩ 下

(2)　汚染 ↔ □□

① 隔　② 化　③ 漂　④ 白　⑤ 浄　⑥ 離　⑦ 美　⑧ 毒　⑨ 解　⑩ 菌

(3)　醜聞 ↔ □□

① 視　② 著　③ 名　④ 綺　⑤ 凝　⑥ 声　⑦ 気　⑧ 句　⑨ 麗　⑩ 品

(1) 26　(2) 27　(3) 28

問三　次の(1)・(2)の慣用句の意味として最も適切なものを、それぞれ①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

(1)　高をくくる

① 正直になること
② 覚悟を決めること
③ 物事を軽く見ること
④ 嘘ばかり述べること
⑤ 慎重に事を進めること

(2)　図に当たる

① 予想通りに行かないこと
② 計画通りに物事が進むこと
③ 狙い通りになって得意になること
④ 相手の弱点などを推測し当てること
⑤ 思い通りに行かず壁にぶち当たること

(1) 29

(2) 30

問四　次の(1)・(2)の文の傍線部と同じ用法であるものを、それぞれ①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

(1)　私の妻は宇宙飛行士だ。

① 明日の天気は良さそうだ。
② この宝石は本当にきれいだ。
③ 豪華客船が事故で沈んだ。
④ 備えがあれば安心だ。
⑤ 友人の結婚式は来月だ。

(2)　卒業旅行は海外に行こう。

① お花見会場には十時に集合ね。
② 病院では静粛にお願いします。
③ この怪我は治りそうにない。
④ お盆は故郷の新潟に帰っている。
⑤ 担任の先生に叱られてしまった。

(1) 31

(2) 32